RYOKO FUKASAWA PIANO RECITAL

深沢亮子ピアノリサイタル

～ブリュッセル弦楽四重奏団と共に～

2007年3月2日（金）7時　紀尾井ホール

マネジメント：ShinEn 新演奏家協会 03-3561-5012

今日はお忙しい御中ご来場下さいまして、誠に有り難うございます。心より御礼申し上げます。

ブリュッセル弦楽四重奏団は、これまでにも度々共演させていただいておりますが、昨年３月、私のリサイタル「モーツァルトの夕べ Part Ⅰ」で、多くの方々に深い感銘を与えて下さいました。今回、メンバーのご希望もあり再びお招きいたしますことになりました。

プログラムにはオーストリーとドイツの巨匠であるモーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトの曲を組んでみました。崇高で美しいなかにも人間的なあたたかみやユーモアのある作品と、私たちの演奏をお楽しみ頂けましたら大変幸せに存じます。

2007年3月2日

深沢亮子

PROGRAMM

モーツァルト ● ピアノとヴァイオリンのためのソナタ ホ短調
W.A.Mozart　Sonate für Klavier und Violine e-moll K.304

Allegro　Pf：深沢亮子
Tempo di Menuetto　Vn：フィリップ・コッシュ

シューベルト ● 弦楽四重奏曲 第13番 イ短調「ロザムンデ」作品29
F.Schubert　Streichquartett Nr.13 a-moll 'Rosamunde' Op.29 D.804

Allegro ma non troppo　1stVn：フィリップ・コッシュ
Andante　2ndVn：ローランス・コッシュ
Menuetto. Allegretto　Va：イーヴ・コルトヴリント
Allegro moderato　Vc：リュック・ドゥエーズ

シューベルト ● 12のワルツ、17のレントラーと9つのエコセーズ 作品18より
F.Schubert　12 Walzer, 17 Ländler und 9 Ecossaisen Op.18 D.145

ワルツ ロ長調 作品18-2、ロ短調 作品18-6
Waltz H-dur Op.18-2, h-moll Op.18-6

レントラー 変二長調 作品18-11、変ニ長調 作品18-7
Ländler Des-dur Op.18-11, Des-dur Op.18-7

36のオリジナルワルツ 作品9より
36 Originaltänze Op.9 D.365

ヘ長調 作品9-32、ヘ長調 作品9-34
F-dur Op.9-32, F-dur Op.9-34

4つの即興曲 作品142より
Vier Impromptus Op.142 D.935

変イ長調 作品142-2、ヘ短調 作品142-4
As-dur Op.142-2, f-moll Op.142-4

Pf：深沢亮子

ベートーヴェン ● ピアノ四重奏曲 変ホ長調 作品16
（ピアノと管楽のための五重奏曲を作曲家自身によりピアノ四重奏曲に編曲）
L.v.Beethoven　Quartett für Klavier, Violine, Viola und Violoncello Es-dur Op.16

Grave. Allegro ma non troppo　Pf：深沢亮子
Andante cantabile　Vn：フィリップ・コッシュ
Allegro ma non troppo　Va：イーヴ・コルトヴリント
Vc：リュック・ドゥエーズ

曲目解説

菅野浩和（すがの ひろかず）

モーツァルト●ヴァイオリンのオブリガートつきピアノ・ソナタ
（ピアノとヴァイオリンのためのソナタ ホ短調 K.304）

ヴァイオリンとピアノが対等の立場と役割が確立する直前の時期の作品で、現在では「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ」の範疇に含めるのが一般的だが、一聴して分かるように、ピアノが優勢で、主役格に在る。18世紀半ば以前にはこうした形態の作品が多く作られており、モーツァルトもその頃はそうした先人たちの影響の下に在った。とりわけ1777年9月からの、マンハイム、パリを主目的地とする1779年1月までの大旅行時のはじめの時期に、ミュンヘンで知ったシュースターの6曲のヴァイオリンとピアノのためのソナタ（ディヴェルティメント・ダ・カメラ）によっての開眼は大きく、次の滞在地マンハイムで着手し、最終地のパリで6曲揃った作品群は、そうした新境地の二重奏ソナタ式の、過渡期を脱しようとする意欲的な成果である。

同種の作品を6曲まとめて出版する習慣はバロック時代からの通例で、モーツァルトの、マンハイム・パリ時代のソナタもマンハイムで完成の3曲（K.301～303）と、マンハイムで着手されたと推定されるが、完成はパリのK.304と、パリ時代と考えられるK.305～306をパリで出版し（11月に）、バイエルンで選定侯妃アンナ・ゾフィーに献呈している。

これら6曲中の第4番に当たるK.304は、モーツァルトのこの種のソナタ中、唯一の短調作品ゆえ、パリでの不幸、母の死と結びつける見方もあったけれども、パリ入り以前の、マンハイムで着手されたとすると、それは当たらないであろう。

この時代のモーツァルトのこの種のソナタは2楽章制（K.301～306中、K.306のみが3楽章制）であり、このK.304は**第一楽章** アレグロ、ソナタ形式の音楽、**第二楽章**は「テンポ・ディ・メヌエット」、構造的にはロンド形式である。

シューベルト●弦楽四重奏曲 第13番 イ短調「ロザムンデ」作品29

シューベルトの美しい音楽を伴ったフォン・シェジー（1783－1856）のロマン劇「ロザムンデ、キプロスの女王」が、シューベルト26才の1823年に、ヴィーンのアン・デア・ヴィーン劇場で上演された。劇としては不評だったがシューベルトの音楽は好評だったし、シューベルト自身も、その音楽に愛着を抱いて、後に他の作品に転用を行った。

その最初の例は、劇上演の翌年完成の「弦楽四重奏曲 イ短調 作品29」で、劇音楽の間奏曲第2が調を変えて用いられている。そのうえ3年後のピアノ曲「即興曲 作品142」の4曲中の3曲目にも、ここでは原調の変ロ長調で転用している。

この弦楽四重奏曲を作曲した頃、1824年は、彼は健康を害していたが、そのためか3曲予定の作品29に、結局この1曲だけしか完成させることができなかった。作品は当時

最高の名声を誇っていたヴァイオリニストのシュパンツィヒに捧げられ、彼の四重奏団で1824年３月14日、ヴィーンで初演された。

全曲は以下の４楽章から成る。まず**第一楽章**はアレグロ・マ・ノン・トロッポ、ソナタ形式に則っている。**第二楽章** アンダンテが劇音楽「ロザムンデ」の間奏曲の音楽を使ってのロンドふうの、愛すべき楽章である。**第三楽章**はメヌエット、アレグレットと記されており、初演時は好評であった。**フィナーレ**はアレグロ・モデラートで、ロンド形式だが、ハンガリーふうの趣きもあるのは、彼はハンガリー系のエシュテルハージー伯爵の別荘に、すでに1818年に訪れ、つづいてこの年（1824年夏）も赴く計画があったため、ハンガリーふうの素材は身近であったからであろう。

シューベルト●12のワルツ、17のレントラーと９つのエコセーズ 作品18より
36のオリジナルワルツ 作品９より

ここで弾かれるワルツ、およびレントラーは計６曲。１曲１曲はごく短く、構造も単純である。レントラーとは「ラント」、すなわち地方とか田舎ゆかりの舞曲のことで、ワルツをもっと素朴にしたような踊り、あるいは踊りの音楽のこと。シューベルトゆかりで後に「シューベルティアーデ」と呼ばれる、音楽好き、踊り好きの、市民階層の人たちが、適当な家のサロンに集まって音楽や踊りを楽しんだ集いの一種で、シューベルトの音楽が主な目玉とされていた集会のグループ名があったが、シューベルトはそうした気さくな音楽好きの人たちのために宮廷舞曲とは違った、素朴な、気どりのないドイツふう舞曲を、そのような会合ではピアノで奏で、後にそれらを記譜し、出版もした。

「**12のワルツ、17のレントラー、９つのエコセーズ 作品18(D.145)**」はおよそ1815－21年の期間の作品18(D145)、なお今回は登場しないが「エコセーズ」とは「スコットランドの」を意味するフランス語だが、後に「イギリスの」という拡大された意味にも用いられ、シューベルトの曲名では後者に該当する。「**36のオリジナルワルツ 作品９(D.365)**」は1821年の刊。こちらはワルツだけだが、今回は両曲集（作品18と作品９）から計６曲が選ばれている。おのおのがとりわけ短小なので、２曲づつ関連のつけられる曲を並列している。すなわちまずロの調の長調の曲と短調の曲、つぎは変ニ長調のレントラーを２曲、最後はヘ長調のワルツを２曲。このように３拍子のワルツ系の曲を並べて楽しむこととして、シューベルト以前ではモーツァルトの「ドイツ舞曲」、降るとブラームスの作品39のワルツ集など、いろいろ類例がある。

シューベルト●４つの即興曲 作品142より

死の前年に当たる1827年の作曲。「即興曲」と名付けられていても、後にシューマンが判断したように、３曲目は別として、他の1、2、4曲目を連ねてソナタとすることも可能とも見られる。第一曲 アレグロ・モデラート、ロンド形式あるいはソナタ形式の、構

成のしっかりした曲。第二曲はトリオつきメヌエットのアレグレット。第三曲が3年前に「弦楽四重奏曲 イ短調」の第二楽章の変奏曲のテーマとして使用した1823年の劇音楽「ロザムンデ」の間奏曲を主題としての5曲の変奏曲によるアンダンテ楽章。第四曲はアレグレット・スケルツァンドで、自由な3部分形式。すでに弦楽四重奏曲「ロザムンデ」のフィナーレにも見られたような、ハンガリーふうの特色も感じられる楽曲である。なお第三曲の変奏曲の中にもハンガリー色を指摘する見方もある。

これらの4曲から、今回は第二曲と第四曲が弾かれる。なおこの作品に与えられた「作品142」なる番号は、作曲者は関(あずか)り知らないことで、ある出版社の誤って使用された例が後々他でも踏襲されるようになったのが真相という。むしろ今日ではD.935に切り換えるべきか。

ベートーヴェン●ピアノ四重奏曲 変ホ長調 作品16

この作品は、そもそもはピアノと4本の管楽器のための五重奏曲として、1797年に作曲された。作品番号は16が与えられた。ベートーヴェンにとっては、すでに5年前(1792年)からヴィーンに移って作曲と演奏活動を展開させていたが、この年の4月6日に初演されたこの五重奏曲のピアノを弾いている。他の4本の管とは木管四重奏の標準とされるオーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットである。(木管四重奏だが、ホルンはその定席の一員)つづく1798年には、皇帝や皇族臨席のコンサート(サリエリ主催)にもこの曲が演奏されて、彼の名をヴィーンに高めることとなった。

しかしこの頃は、フランス革命後のナポレオン勢力の伸長がヴィーンにも迫りつつある時期で、しかもベートーヴェン個人にとっては聴覚の異常が彼自身を苦しめはじめたことは見落とせない。こうした状態のベートーヴェンだが、1801年3月に、ヴィーンの出版社モロからの話によってこの管楽五重奏曲をピアノと弦による四重奏曲に編曲することにした。原曲は上記のように栄誉のコンサートに登場した栄えある曲だが、ピアノに合わせる他の楽器が木管四重奏では今後の演奏の機会は少ないと考えて、再演の容易な弦楽器群とのアンサンブルへの改変を計画した。すなわち4本の管を3本の弦楽器(ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ)に変えるプランである。その際ピアノはほとんど変えず、管の4パートを弦のトリオに適合するように別パートを作ればよかった。こうして作られたピアノ四重奏曲は、原曲と同じ作品16と番号づけられ、シュヴァルツェンベルク公爵に献じられた。この新稿の出版年は1801年、なお作品はつぎの3章から成る。

第一楽章はグラーヴェの序奏とアレグロ・マ・ノン・トロッポによるソナタ形式の音楽。**第二楽章**はアンダンテ・カンタービレ、単純なロンド形式である。**第三楽章**はロンドで、アレグロ・マ・ノン・トロッポの音楽である。

ブリュッセル弦楽四重奏団　The Brussels String Quartet

ヴァイオリン
フィリップ・コッシュ
Philippe Koch, Violin

ヴァイオリン
志田とみ子
Tomiko Shida, Violin

ヴィオラ
イーヴ・コルトヴリント
Yve Cortvrint, Viola

チェロ
リュック・ドゥエーズ
Luc Dewez, Violincello

伝統あるベルギーの室内楽団を代表する四重奏団で近年日本でも注目を浴びている。4人のメンバーの個性や技量を活かしつつ、伸びやかでも統一感のある演奏ぶりは、ここ数年東京公演の度に「音楽の友」、「音楽現代」ほか各誌で好評を博している。フィリップ・コッシュと志田とみ子の2人のヴァイオリニストは、いずれも巨匠アルトゥール・グリュミオーの高弟。ヴィオラのイーヴ・コルトヴリント、チェロのリュック・ドゥエーズの名手2人を加え、4人の息の合ったアンサンブルは日本でもファンを増やしている。毎回優れたソリストを迎えての五重奏も話題のひとつであり2000年、2001年、2003年、2006年と深沢亮子と共演し好評を得ている。四重奏団の第二ヴァイオリンを務める志田とみ子はこの楽団の主宰者で長野県松本市出身。故鈴木鎭一氏の門下で、18歳のときベルギーに渡り、現在もブリュッセル在住。1961年ミュンヘン国際音楽コンクールで第2位（1位なし）を受賞。この四重奏団を率いての活動のほかブリュッセル音楽院で教授を務め、国立ブリュッセル歌劇場（王立モネ）においてもヴァイオリン奏者として活躍している。

※尚、今回の演奏会はヴァイオリンの志田とみ子が、肩の故障のため出演できなくなりましたので、第二ヴァイオリンをローランス・コッシュが担当いたします。

ヴァイオリン
ローランス・コッシュ
Laurence Koch, Violin

4才の時に父 フィリップ・コッシュの教えを受けヴァイオリンを始める。リュクセンブルクのコンセルヴァトワールとリェージュのコンセルヴァトワールを一等賞の成績で卒業。その後、室内楽、リサイタル、オーケストラとのコンサートを度々行う。現在、リュクセンブルクのコンセルヴァトワールにてヴァイオリン教授として20才の若さで活躍している。